呉音系字音を反映する二字漢語の抽出方法
——『半井家本医心方』を用いて　【附資料】——

加　藤　大　鶴

【キーワード】
医心方　呉音　声調　抽出方法

1　はじめに

漢語アクセントの史的研究において、文献資料に現れた漢語声点が原音声調とどのような関係にあるか同定することは、最初に行わなければならない基本的な作業である。亀井孝1942、小倉肇1983では漢字音の捉え方として、原音に忠実な姿—体系としての規範性を持った音と、日常会話に近い場—日本語の音韻体系音節構造に融和した音との２つのレベルを想定しており、稿者も両者のレベルを分けて漢語声調の変化を論じたことがある（拙稿2006）。本稿で取り扱う『半井家本医心方』が本邦で撰述された国書であるということ、また資料内に観察される言語的徴証とを併せ考えれば、本資料に現れる字音注記は他の漢文訓読資料に比して後者のレベルに近く位置づけられることが推測される。その言語的徴証の一つが、たとえば呉音系字音と漢音系字音に基づくそれぞれの漢字音の、語彙ごとの混在である。沼本克明1982での、和文資料に現れる漢字音の特徴が「必ずしも均質性が高くない—すなわち、呉音系字音と漢音系字音が混在している一点」（p.61）にあるという指摘は、『医心方』における漢語声点の差声状況にも当てはまる。

こうした性格の資料に現れる漢語声点は、和語アクセント体系への融和を考えるという点で、漢語アクセントの史的研究において特に有用と考えられるが、資料に現れた字音注記が原音声調とどのような関係にあるか同定するという基本的な作業を行うことは容易ではない。従来、呉音系字音と漢音系字音が混在する資料が研究に重点的に用いられてこなかったのは、両者を分離する際の同定の難しさにあると考えられる。

漢音系字音声調が、全濁上声字の去声化や平声・入声の陰陽類分化を除けば、切韻系韻書記載の声調にほぼ一致することは知られているが、呉音系字音の場合は体系的な把握が難しく個別例からの帰納的方法によるほかない上、同字であっても資料や語による揺れが漢音系字音よりは多く見られる。これは、呉音系字音が漢音系字音以前の複層性を混在させながら成立していること（河野六郎1975ほか）や、あるいは呉音系字音の声調認識が漢音系字音学習のなかで生まれたため

に必ずしも原音との関係で捉えきれないものを含んでいること（金田一春彦1951ほか）、などと関係があろう。したがって、漢呉混在資料からどちらかを抽出してその声調上の特徴を論ずるためには、従来は仮名音注が付されているものに限り、しかも両者の仮名音形に明らかな違いあるいわゆる清濁字（明母・泥母など）に限定して取り扱うなどの、慎重な方法が取られた（奥村三雄1961）。こうした方法は、呉音系字音声調の体系そのものを論ずるには特に有効であるが、当然のことながら対象は限定的となる。

本稿で述べる呉音系字音声調の抽出は、厳密にいえば非漢音系字音声調とでも呼ぶべきもので、複層性や日本語音韻体系内で生じた変化（いわゆる和音化）例を雑多に含むことになるが、抽出の後に他資料との相互比較のなかで分析検討して行ければと考えている。拙稿2006はその検討を行うことが目的の一つでもあったが、検討の前提となる呉音系字音声調の抽出方法については、紙幅の関係上部分的にしか言及できなかった。

本稿では、呉音系字音に基づく漢語声調を抽出した結果を資料として提示する。また拙稿2006で十分に触れることができなかった、抽出した呉音系字音の声調上の特徴を指摘し、漢語アクセント史研究の一材料としたい。

2　資料と声点について

医心方は永観二年（984）、丹波康頼によって朝廷に献上されたと伝えられる全30巻になる医書である。本資料の諸本の系統には大きく仁和寺本系統、半井本系統の二つがあるとされる（杉立1991）。本稿では天養二年（1145）書写・加点の半井家本医心方を用いた。調査はオリエント社より影印刊行（モノクロ）されたものを中心に行い、疑問・不明の点は原本（国立博物館蔵）を確認した。

声点をはじめとする字音注記には、墨筆・濃色朱筆・淡色朱筆の三種類がありそれぞれ識語の記述と対応し、異なった加点者が想定される（松本1979・築島1994）。非漢音系字音漢語を対象とする本調査の結果では、加点者によって同語に異なった声点が加点される例はほとんどなかった[(1)]。このため、三筆を区別せずに取り扱うこととした。

3　呉音系字音漢語の抽出方法

まず二字漢語相当の字音注記と認める際の判断は、漢字二字のもののうち、①音合符があるもの、②資料中処方の薬剤を示すために上下に空白を設け独立して

---

(1)「吹咀」がA.2.10墨筆で平＋上であり、A.3.08淡色朱筆で平＋去であるのみ。C.2.26心痛は墨筆で去＋上0313b8、濃色朱筆で○＋濃去0609a3であるが、単字声調を記したとの解釈と考えられる。

いる部分に注記されるもの、③上記の形態をとらなくとも「人参」「紫苑」など他資料から当時語彙的な定着が推定されるものとした。③の判断には別箇所で②の形態を取ることなども参考にしている。

さて、呉音系字音漢語の抽出方法は、いわゆる漢音呉音の声調対応を用いる。これは漢音系字音と呉音系字音が声調上逆に対応する現象を利用するものだが、両声調の対応には一致する例もかなり含まれていることもまた知られている[2]。したがって、本稿で取り扱う二字漢語の場合、二字とも漢音系字音と逆の対応するものを選択するとなると、対象はかなり限定されてしまう。そこで、漢字二字のうち少なくとも一字が漢音系字音と逆の対応を示せば二字漢語が呉音系字音に基づいている可能性ありとみなし、抽出することとした。

漢音系字音であるか否かの判定には、切韻系韻書である『大宋重修広韻』（以下広韻）を用いた。対応にあたっては、呉音系字音側に上声と去声を区別せず去声として扱った。また広韻側の全濁上声字が呉音系字音側の去声と対応するものは不一致に含めた。入声＋入声の組み合わせは分析の対象外とする。任意の声調＋入声の組み合わせは、実質一字の対応しか見ていないことになるが参考として提示した。表1は抽出した全声調型の内訳である。なお残った二字漢語は一応漢音系字音を反映するものと考えられるが、異語数182延語数217であった。本資料では呉音系字音読み漢語と漢音系字音読み漢語がほぼ半数ずつ混在していることが分かる。

声調型		異語数	延語数
平	平	12	15
	上	16	36
	去	5	6
	入	6	8
上	平	2	2
	上	1	1
	去	2	2
	入	3	5
去	平	11	15
	上	56	128
	去	4	4
	入	9	16
入	平	6	8
	上	7	13
	去	2	3
	入	−	−
計		142	262

表1　呉音系字音全声調型

1節に述べたとおり、厳密に言えばここに抽出されたのは非漢音語であり、去声＋去声や上声＋去声など声調型から呉音系字音と解釈しがたいものもわずかに含まれる。また、この抽出方法は、①複数字で構成される漢語について両系の字音を互いに混ずる例は僅少である[3]ということと、②院政期以前の漢音系字音に

(2)　高松政雄1982（p.299）によれば、呉音系字音の声調体系は中古から中世に渡って徐々に整備され、漢音系字音との対応が鮮明になっていくとされる。当該論文によれば両声調の一致の割合は、『図書寮本類聚名義抄』から『貞元華厳経音義』までおよそ4割から5割に達するという。

(3)　築島裕1959（p.212）、柏谷嘉弘1987の各資料分析など。沼本克明1982（p.1108）では、平安後期以後の変体漢文には漢音呉音を混じた漢語が僅少ながら認められるとする。

は呉音系字音に見られるような目だった声調変化は見られないことを前提としているが、例外もあり得るだろう。上に触れた、呉音系字音と考えがたい例との関係も含め、別途検討する必要があろう。

4　分析

4.1　去声と上声の現れ方

呉音系字音の声調における第一の特徴は、去声と上声の現れ方にある。表２から、語頭・非語頭の語環境によって、去声と上声が相補分布的に現れることがわかる。

声調	語頭	非語頭
上声	8	80
去声	80	13

表２　語環境別の現れ方

先行研究によれば呉音系字音の声調はもと平声・去声・入声の三声体系であり、上声は単語内に高さの山が二ヶ所以上分かれることを避けるという和語の制約のため、去声＋去声の後項が連音上変化したものとされる[(4)]。したがって原則的に上声は去声に後接するものが多いことになるが、本資料に現れる後項の上声は異なりで全80例のうち、56例（約７割）が去声に後接する形であらわれていることが分かる[(5)]。同字が語頭で去声、非語頭で上声のように相補分布的に現れるものは、本資料においては13字が確認できた。以下のリストに、語例を示す[(6)]。これらのうち「消」字を除く12字が、語頭で去声、去声に後接する場合の非語頭上声という分布

	語頭去声	非語頭上声
雄	C.2.49　「雄黄」去上	C.2.33　「天雄」去上
花	C.3.1　「華扁」去去	C.2.9　「芫花」去上
間	C.2.12　「間使」去上	C.2.31　「中間」去上
心	C.2.26　「心痛」去上	C.2.11　「桂心」去上
		C.2.44　「煩心」去上
人	C.2.35　「人参」去上	C.2.34　「桃人」去上
	C.2.36　「人中」去上	
	C.2.37　「人溺」去上	
	C.2.38　「人屎」去上	
消	C.4.5　「消藥」去入	A.2.12　「芒消」平上
		D.2.7　「朴消」入上
中	C.2.31　「中間」去上	C.2.36　「人中」去上
		C.2.30　「亶中」去上
頭	C.1.8　「頭眩」去平	A.2.6　「政頭」平上
		C.2.1　「烏頭」去上
房	C.4.6　「房室」去入	C.2.42　「蜂房」去上
風	C.2.41　「風市」去上	C.2.43　「防風」去上
麻	C.2.45　「麻黄」去上	C.2.22　「升麻」去上
連	C.2.54　「連翹」去上	C.2.56　「黄連」去上
黄	C.2.55　「黄芩」去上	A.2.9　「大黄」平上
	C.2.56　「黄連」去上	A.2.11　「蒲黄」平上
	C.2.57　「黄耆」去上	A.2.14　「留黄」平上
	C.4.9　「黄蘗」去入	C.2.16　「牛黄」去上
		C.2.45　「麻黄」去上

(4)　奥村1961では「３声プラス３声においては、あとの３声が２声に変る」とされる。

(5)　拙稿2006では、このうちのいくつかは音調のグループ化によって生じたものと解釈した。

(6)　以下、各挙例の頭に付された番号は、５に掲げた資料の番号に対応している。

をなしており、上記の特徴を示していることがわかる。

4.2　非去声に後接する上声

4.1のリストには、A.2.12「芒消」、D.2.7「朴消」入上、A.2.6「政頭」、A.2.9「大黄」、A.2.11「蒲黄」のように、平声・入声に後接する上声が３字５例見られた。こうした去声以外に後接する上声は、これらを含め異なりで23例（平声に後接するものが16例入声に後接するものが７例）ある。

黄―去	門―去
去―平	咀―平
消―去	膠―去
星―去	精―去
瘦―平	荷―去
頭―去	鮮―平
尿―去	神―去

このような例が生ずる要因について、沼本克明1979では「『和名類聚抄』『類聚名義抄』などに現れる平安時代の「日常漢語」に「原則として語頭に無い上声が、語中・語尾に非常に多い」とし「一定の傾向の中で特定の声調から変化したとは考えにくい」としている。そこでA.2とD.2に掲げた平上・入上型の上声字を他の呉音系字音資料[7]と対照し、右のリストに示す。各語例は左辺が当該字、右辺が他の呉音系字音資料から知られる声調である。

リストからは、本資料の上声字には他資料に去声で対応するものと平声で対応するものとがあり規則的な対応を見出すことはできない。この点でこれらの例は沼本1979に指摘されるのと類似した言語現象を反映したものといえる。同論文によれば、『和名類聚抄』俗音注付漢語のような口頭語に近いとされる資料では「語アクセント化」のために「語中・語尾に於いては、語頭の場合に比して、漢字本来の四声を保つ度合いが非常に少なかった」とされる[8]。特に学習音ではない口頭音を反映した資料には散発的に見られる現象であると考えられようか[9]。

声調	１音節字	２音節字
上声	2	8
去声	3	4

表３　非語頭環境での現れ方

このリストに現れた非去声に後接する上声字のうち他資料で去声で対応するも

---

(7)　比較に用いた呉音系字音資料は『九条本法華経音』『法華経単字』『承暦本金光明最勝王経音義』『類聚名義抄』図書寮本と観智院本の呉音・和音注である。

(8)　沼本克明1997（pp.245-271）でも『妙一記念館本法華経』を資料として同様の指摘がなされる。同書で掲げられる例には本資料のA.2.15「羸瘦」平上など共通するものが散見されるが、これはこうした「語アクセント化」した「呉音読漢語が一つの伝承線上にあるものであることをうかがわせる」（p.270）という同書の指摘を裏付けるものと考えられる。

(9)　佐々木勇1987では、鎌倉時代初期の呉音直読資料『観無量寿経註・阿弥陀経註』では、非去声字に後接する上声が去声から変化したものとした上で、その現れ方には字音の韻尾による違いがあるとする。本資料では、音節数やこうした観点から統計的な有意差を認めることはできなかった。直読資料と訓読資料の資料性による違いと考えるべきか。

のは10例となるが、一方で本資料には非去声に後接する去声字が７例存する（A.3、B.3、D.3参照）。この10例の上声字が本来去声であったものだとすると、去声にとどまった７例との現れ方の違いには何らかの音声的条件があるのだろうか。両者の現れ方の違いを音節数別にまとめたものが表３である。しかし単字レベルでの奥村三雄1961の指摘「呉音における３声は殆んど二音節カナ表記の字音に限られ、一方、２声は一音節カナ表記が圧倒的に多い」はここからは見て取れず、２音節のものに上声が多くあらわれているようにさえ見られる。むしろこうした２音節上声字については、奥村三雄1961で「語中尾に存する上昇調（３声）が高平調（２声）に変り易い」と述べられるとおりであり、音節数にかかわらず非語頭環境で揺れを伴っていたのではないかと考えられる。

4.3　語頭の上声

３節の表１に示したとおり語頭に現れる上声字は合計８例である。これは去声字の100例と比較すれば僅少であり、上声は語頭に立たないという呉音系字音の特徴を反映しているといえる。語頭の上声字については、もと去声だったものが１音節字に限り漸次変化したものとされる。本資料の語頭環境における上声字と去声字を音節数別に分けて示したものが表４である。表からは4.2での分析と同様に音節による有意差は見られない。語頭に現れる上声は『類聚名義抄』『和名類聚抄』にもわずかながら見られる現象であり、同様に本資料でも例外的に生じたものと見るべきだろう。

同字における揺れは次の３例がある。１音節字のうちB.21.「烏頭」上上はC.21.に去上でも現れ、C.2.39「巴豆」は去上で現れつつも上○も１例存する。２音節字はB.11.「前頂」上濁平に対しC.2.27「前胡」去上が現れる。

4.4　去声または上声に後接する去声

去声または上声に後接する去声は、単語内の音調の高さが２箇所に分かれてしまうため、呉音系字音を反映した資料では通常見られないものである。上声＋去声が異なりで３（B.3）、去声＋去声が４例（C.3）と僅少であるため、誤記の類として例外とみなしたほうがよいかもしれない。ただし差声単位の問題として解釈可能なものもある。例えばC.3.2「経方」去去は二字漢語を一つの差声単位としているのではなく、単字を単位としている可能性がある。

声調	１音節字	２音節字
上声	4	4
去声	19	81

表４　語頭環境での現れ方

本資料には以下の２例のように、二字漢語への差声では非語頭環境で上声となるものが、一字への差声では去声となるものがある。この現象は差声単位の違いとして解釈すべきであろう。

	非語頭去声	非語頭上声
痛	C.2.26 「心痛」○去	C.2.26 「心痛」去上
尿	A.2.1 「遺尿」○去	A.2.1 「遺尿」平上

「経方」(去＋去ホウ) は後項にのみ仮名音注があり、前項とのつらなりではなく特に後項のみにフォーカスをあてた差声となっていることを推測させる[10]。つまり先に掲げた２例と同様に、差声単位が単字であると考えられるわけである。

5　おわりに

漢音系字音と呉音系字音を混ずる資料から呉音系字音を抽出するために、３節に示した方法を用い、その結果の検証を行った。検証を通じて先行研究で報告される、呉音系字音に特徴的な次の言語事象を確認することができた。

1．語頭環境に去声、非語頭環境に上声が現れることが多い。
　(a)　同字については語環境によって相補分布的な現れ方をする。
　(b)　語頭に上声点が現れることは特に少ない。
　(c)　非語頭に去声が現れることは少ない。

2．非去声に後接する上声が見られる。
　(a)　非去声に後接する上声には、平声・去声それぞれから変化したものを含む。
　(b)　非去声に後接する上声の現れ方には、音節数や韻尾の形は関与していない。

このうち２(a)(b)は、口頭語に近い他文献においても認められる現象であり、本資料の字音注記が１節で述べた「日常会話に近い場」に位置づけられることを裏付ける。今後、こうした現象について個別例を対象として具体的な検証を行う必要があるだろう。

本稿では抽出方法の検証を行うことが主な目的であったが、平声（入声）＋平声（入声）型については言及していない。去声に関わる言語事象についてのみ検

---

(10)　なお上字は『保延本法華経単字』におよび『承暦本金光明最勝王経音義』に去声。下字は『保』に掲出字上声・反切去声、『観智院本類聚名義抄』に「去ハウ」「去ホウ」、『金』に去声。本資料の「経」「方」も呉音系字音を反映したものと考えられる。「方」は池上禎造1960・福島邦道1961によれば古来より方向・方法の場合にはハウ、四角・医術の場合にはホウと区別したとされる。

証することで、抽出した母集団の「呉音系字音」性を論じてきたわけだが、残された声調型についても別途個別的に検証する必要がある。このほか、二字ともに広韻に一致してしまうような例は本稿での調査方法では取り逃してしまっているという問題も残されている。これらは仮名音注などを手がかりにしながら個別的に見ていくほかないだろう。

以上、抽出方法については本稿で論じた範囲に限れば、有効であったと結論してよいと考えられる。

（参考文献）

池上禎造　1960「「方」字の合音用法」（『島田教授古稀記念国文学論集』関西大学国文学会所収）

奥村三雄　1961「呉音声調の一性格」訓点語と訓点資料18

小倉肇　1983「〔書評〕・沼本克明著『平安時代鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』」国語学135

柏谷嘉弘　1987『日本漢語の系譜』東苑社

加藤大鶴　2006「音調のグループ化―『医心方』呉音系字音二字漢語を資料として―」国語と国文学18-1

亀井孝　1942「国語現象としての外国語の流入」（国語学振興会編『現代日本語の研究』白水社、『亀井孝論文集５　言語文化くさぐさ：日本語の歴史の諸断面』吉川弘文館、1986所収）

金田一春彦　1951「日本四声古義」（『国語アクセント論叢』法政大学出版会）

河野六郎　1975「『日本呉音』について」言語学論叢15

小松英雄　1971『日本声調史論考』風間書房

佐々木勇　1987「呉音二音節去声字に対する上声点加点例について」国文学攷113

杉立義一　1991『医心方の伝来』思文閣出版

高松政雄　1982『日本漢字音の研究』風間書房

築島裕　1959『国語学要説』創元社

築島裕　1994「半井家本醫心方の訓点について」（『醫心方の研究』オリエント出版）

沼本克明　1979「平安時代に於ける日常漢語のアクセント」国語国文48-6

沼本克明　1982『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院

沼本克明　1997『日本漢字音の歴史的研究―体系と表記をめぐって―』汲古書店

福島邦道　1961「四方なる石」国語学46

松本光隆　1979「書陵部蔵医心方の訓方―助字の訓方を中心として―」鎌倉時代語研究２

資料　呉音系字音二字漢語　声調型別一覧

(1) 掲出漢語は概ね呉音読みに基づく字音仮名遣いで五十音順に並べた。
(2) 字体は原本の表記にちかいものを選択した。
(3) 本稿での用例の掲げ方は次の通り；a．各用例の番号に続く「　」内が半井家本掲出形。Ⓡ＝右傍内側、ⓡ＝右傍外側、Ⓛ＝左傍内側、①＝左傍外側、㊥＝欄外注。ＡＢＣは筆の種類。声点については次項参照。出現箇所は（　）内に示した。初めの数字２桁＝巻、次の２桁＝丁、ａ／ｂ＝表／裏、末尾の数字＝行（例1234a5…第12巻34丁表５行目）となっている。
(4) 声点はそれぞれ平声＝平、上声＝上、去声＝去、入声＝入で示した。双点で注記されているものは「濁」をつけて示した。
(5) 該当字に字音注記がない場合は「○」で示した。
(6) 各項目タイトル（「平声＋平声型」など）に付記した数字は異なり語数。（　）内は延べ語数。

A　平声で始まるもの

A.1　平声＋平声型…12（15）語

1．「後頂」Ａ平＋Ａ平（0202a9）
2．「五味」Ａ平＋Ａ平（0904b8）
3．「上気」Ａ平＋○（0903a9）、Ｃ平＋Ｃ平（0903b7）
4．「少気」Ｃ平＋Ｃ平（0901a4）
5．「淡飲」Ｃ平＋Ｃ平（0901a5）、Ｃ平ⓇＡ音談＋Ｃ平ⓇＡ音蔭（0914b8）
6．「短気」Ｃ平＋Ｃ平（0901a3）
7．「痛惚」Ｂ平＋Ｂ平（0629b5）
8．「附子」Ａ平＋Ａ平（0136a8）、ⓇＡフ＋ⓇＡシ（0503b5）、ⓇＡフ＋ⓇＡシ（0523a7）、ⓇＡフ＋ⓇＡシ（0527a9）、ⓇＡフ＋ⓇＡシ（0724b2）、ⓇＡフ＋ⓇＡシ（0828b2）、ⓇＡフ＋ⓇＡシ（0828b7）
9．「領数」Ａ平＋Ａ平（1906b8）
10．「萇菪」Ａ平＋Ａ平ⓇＡタウ（0129b3）
11．「瘖痘」Ａ平ⓇＡヲム＋Ａ平ⓇＡア（2213b9）
12．「遠志」Ａ平＋Ａ平（0329a7）、Ａ平＋Ａ平（1302b2）Ａ平ⓇＡヲン＋Ａ平ⓇＡシ（2114a9）

A.2　平声＋上声型…16（36）語

1．「遺尿」Ａ平＋Ａ上ⓁＡ奴予反（1235b7）、○＋Ａ去（2302a6）
2．「苦参」Ｂ平＋Ｂ上（1611b7）
3．「鑱去」Ｃ平ⓁＡ尸塩反＋Ｃ上（1615b1）
4．「秦膠」Ａ平＋Ａ上ⓁＡケウ（0309b5）、Ａ平＋Ａ上（0310a4）、Ａ平＋Ａ

上（0317b4）

5.「上星」A平＋A上（0206a8）

6.「政頭」C平＋C上（1613a4）

7.「薺苨」C平＋C上Ⓡ Aチ（0128a1）、A平Ⓡ Aセイⓡ A仁音齊礼反＋Ⓛ A音泥礼反（1930b9）

8.「大棗」A平Ⓛ Aタ＋A上Ⓛ Aサウ（1120a6）、A平Ⓛ Aタ＋A上（1126a8）、A平Ⓛ Aタ＋A上Ⓛサウ（1216a4）、A平Ⓛ Aタ＋A上Ⓛ Aサウ（1227b3）、A平Ⓡ Aタ＋A上Ⓡ Aサウ（2220a3）、A平濁Ⓛ Aタ＋A上Ⓛ Aサウ（2337a2）

9.「大黄」A平＋A上（0342b5）、A平＋A上（1329a2）、A平＋A上（1330b1）

10.「咬咀」A平Ⓡ Aフ＋A上（0127a9）

11.「蒲黄」A平＋A上（0132a2）

12.「芒消」A平Ⓡ Aホウ Ⓛ Bハウ＋A上（0127b8）、A平Ⓛ Bハウ Ⓡ Aホウ＋A上（0314a6）、A平＋A上（0515a4）、A平＋A上（0608b7）、A平＋A上（0616a2）、A平＋A上（0620a7）、A平＋A上（0923b3）、A平＋A上（0926a9）、C平＋C上（1018a6）、A平＋A上（1034a2）、C平＋C上（1216b3）、○＋Ⓡ Aセウ（2013b1）、Ⓡ Aホウ＋Ⓡ Aセウ（2017a5）、Ⓡ Aホウ＋Ⓡ Aセウ（2022b6）、Ⓡ Aホウ＋Ⓡ Aセウ（2228a4）

13.「命門」A平＋A上（0218b4）

14.「留黄」C平＋C上（0907a3）

15.「羸瘦」C平＋C上（0924b5）、A平Ⓡ Aルイ＋○（1013a7）、A平Ⓡ Aルイ＋A上（1139a7）

16.「瘖門」A平＋A上（0206a4）

A.3　平声＋去声型…5（6）語

1.「相反」A平＋A去Ⓡ Aホン（0141b3）

2.「膿涕」A平Ⓡ Aチヨウ＋A去Ⓡ Aテイ（0307a1）

3.「藿菌」A平＋A去（0141a1）、B平＋B去Ⓡ B貝殞反（0155b6）

4.「蘩蔞」B平Ⓡ B音煩＋B去Ⓡ B緑珠反（0166a5）

5.「咬咀」C平Ⓡ C弗禹反＋C去Ⓛ C才与反（0605b3）

A.4　平声＋入声型…6（8）語

1.「鋌戟」A平Ⓡ Aエン＋A入Ⓡ Aケキ（2308a7）

2.「猗脊」A平Ⓡ Aク＋A入Ⓡ Aシヤク（0314a6）

3.「熾熱」A平Ⓡ Aシ＋A入Ⓡ Aネツ（1302b7）

4.「水癖」B平＋B入Ⓡ Aヒヤク（1001b1）

5．「淡熱」A平＋A入0110a5)
6．「嘔逆」B平＋B入（0617b5)、B平＋B入（0623a3)、C平ⓁAヲウ＋C入ⓁAケキ（0803b9)

B　上声で始まるもの

B.1　上声＋平声型…2（2）語

1．「前頂」A上濁＋A平（0202a6)
2．「浮甌」C上＋C平（1605a8)

B.2　上声＋上声型…1（1）語

1．「烏頭」C上ⓇAウ＋C上ⓇAツ（2106b8)

B.3　上声＋去声型…2（2）語

1．「懈惰」A上＋A去（2215b5)
2．「罔像」A上＋A去（2631a9)

B.4　上声＋入声型…3（5）語

1．「闇塞」A上＋A入（2322a9)
2．「痩弱」A上㊥A説文所祐反＋A入（0117a4)、A上＋A入（2101b7)、C上＋C入（2126b7)
3．「蕭蓄」B上＋B入（0157a6)

C　去声で始まるもの

C.1　去声＋平声型…11（15）語

1．「甘遂」A去＋A平（0127b9)、C去＋C平（1029a2)、C去＋C平（1030a1)、A去＋A平（1031a4)
2．「甘草」A去＋A平（1329a2)、A去＋○（0704b7)、A去＋○（0816a6)
3．「奸皰」A去＋A平（2214b6)
4．「五里」A去＋A平（0212a9)
5．「五處」A去＋A平（0202b4)
6．「三里」A去＋A平（0213a7)
7．「生命」A去＋A平（0103a3)
8．「頭眩」C去＋C平（1037b6)、A去＋A平（1038a1)
9．「膿壊」A去ⓇAノウ＋A平ⓇAエ（0254a3)
10．「牡丹」A去＋A平（1312a9)
11．「牡蒙」A去＋A平（0141a5)

C.2　去声＋上声型…57（128）語

1.「烏頭」A去®Aウ＋○（0129a6）、A去＋A上（0136a8）、A去＋○（0325a6）、A去®Aウ＋A上（0338b4）、A去®Aオウ＋A上（0706a2）、C去＋C上（0914a7）、B去＋B上（1003a5）、B去＋B上（1005a1）、去B去＋上B上（1008b3）、®Aウ＋®Aツ（2113a4）

2.「頷嚥」A去®Aカム＋A上（0204a4）

3.「含霊」A去＋A上（0102a2）

4.「乾歐」A去®Aカン＋A上®Aヲウ（0110a5）

5.「干薑」A去＋A上（0321a1）、A去＋A上（0704a3）

6.「芎藭」A去＋A上（0310a4）、A去＋A上（0311a3）、A去＋A上（0311b4）、®Aク＋®クウ（2109a3）

7.「空青」A去＋A上（0125a8）

8.「光明」A去＋A上（0236a2）

9.「芫花」B上＋○（1030b3）、C去®A牛園反＋C上（0906b6）、C去＋C上（1029a4）、C去＋C上（1222b9）

10.「勲黄」C去＋C上（0906b9）

11.「桂心」A去＋○（0319b9）、A去＋A上（1302a3）

12.「間使」A去®Aケン＋A上（1421b8）

13.「肩井」A去＋A上®Aシヤウ（0210a7）、C去＋C上（0709a3）

14.「堅牢」A去＋A上®Aラウ（2102a7）

15.「恒山」A去＋○（0338b4）、A去＋A上（0916b3）

16.「牛黄」A去＋A上（0132a2）、B去＋B上（0616a4）

17.「細辛」A去®Aサイ＋A上（0125a4）、A去®Aサイ＋A上（0319a7）A去＋A上（0319b8）、A去＋A上（0320a9）、A去＋○（0331b2）、A去®Aサイ＋A上®Aシン（1309b6）、B去＋B上（1626b2）

18.「紫苑」A去＋A上（0330b3）、A去＋A上（1317b9）

19.「耳門」A去＋A上（0205a4）

20.「昌蒲」A去＋A上（0125a3）、A去＋A上（0338a5）

21.「上焦」A去＋A上（1461a6）

22.「升麻」A去＋A上（0328b5）、A去＋A上（0342a5）、A去＋A上（0344a3）、C去＋C上（1609b8）

23.「朱沙」A去＋A上（0125a8）

24.「鍾乳」®Cシユウ＋○（0142a7）、A去＋A上（0318b5）、B去＋B上（1640a8）

25.「生薑」A去＋A上（0110a2）、C去＋○（1107b6）

26.「心痛」A去＋A上（0313b8）、○＋B去（0609a3）

27.「前胡」A去＋○（0344b3）、A去＋A上（0914b1）、A去＋A上（0919a4）、C去＋C上（0926a4）
28.「曽青」A去C去＋A上C上（1011a5）
29.「當歸」A去＋A上（0311a4）、A去＋A上（0321a5）、C去＋C上（1609b7）、A去＋A上（2112b6）
30.「亶中」B去＋○（0607a5）、C去＋C上（0907b9）、A去＋A上（1404a3）
31.「中間」A去＋A上（0122a4）、A去＋○（0122b2）
32.「通草」去＋上（0321a1）、C去＋C上（1612a1）
33.「天雄」○＋A上（0129a6）、A去＋A上（0136a8）、○＋A上（0320a4）、A去＋ⓇAオウ（0321a1）、A去＋A上（0816a6）
34.「桃人」A去＋A上（0314a7）
35.「人参」A去＋A上ⓇAシム（0310a4）、A去＋A上（0311b3）、A去＋A上（0314a5）、A去＋A上（0329a6）、A去＋A上（0330a2）、A去＋A上（0338a5）、B去＋B上（0627b1）、A去＋A上（0627b1）、A去＋A上（0815a8）、A去＋A上（0816a8）、A去＋A上（1329a3）、B去＋B上（1640a7）、A去＋A上ⓇAシム（2009a4）、A去＋A上（2023a1）
36.「人中」A去＋A上（0113a9）
37.「人溺」A去＋A上ⓇAネウ（0129a2）
38.「人屎」C去＋C上（1607b1）
39.「巴豆」ⓇAハ＋ⓇAツ（0503a9）、C去＋C上（0605b5）、A去＋A上（0606a5）、A去＋A上（0606b7）、A去＋A上（0828b2）、A去B去＋A上B上（1011a7）、「巴豆」A上＋○（1030b6）
40.「颱疽」C去ⓇAヘウ＋C上ⓇAソ（1930b6）
41.「風市」A去＋A上ⓇAシ（0232a6）、A去＋A上（0822b3）
42.「蜂房」A去＋A上（0132a9）
43.「防風」A去＋○（0129a7）、C去＋C上（0143b7）、A去＋A上（0310a4）、A去＋A上（0311a3）、A去＋A上（0311b3）、A去＋A上（0319a8）、A去＋A上（0319b8）、A去＋A上（0328b5）、A去＋A上（0339a7）
44.「煩心」A去＋A上（0204b4）
45.「麻黄」A去＋A上（0311b3）、A去＋A上（0317a1）、A去＋A上（0320a8）
46.「莽草」C去＋C上（1612a1）
47.「蘘荷」A去ⓇAミヤウ＋A上ⓇAカ（0126b8）、A去ⓇAミヤウ＋A上（0128a5）、A去ⓇAミヤウⓁAメ＋A上（0328b2）、ⓇAミヤウ＋ⓇAカ（0521a3）、ⓇAメ＋ⓇAカ（1227b3）、ⓇAメ＋ⓇAカ（3002b2）
48.「由来」A去ⓁAユ＋A上ⓁAライ（0101a8）
49.「雄黄」A去＋A上（0333a1）

50.「癰疸」A去＋A上（1610b8）
51.「理仲」A去＋A上（2330a5）
52.「龍膽」A去＋A上（0342b6）、A去＋A上（1329a2）
53.「厲兌」A去Ⓡ Aレイ＋A上Ⓡ Aタイ（0238b92）、A去Ⓡ Aレイ＋Ⓡ Aタイ（2208b1）
54.「連翹」C去＋C上（1030b2）
55.「黄芩」A去＋Ⓡ Aコム（0311b4）、A去＋A上（0331b3）、A去＋A上（0341b9）
56.「黄連」A去＋A上（0125a2）、A去＋A上（0334b6）、A去＋A上（0335b6）、A去＋A上（0342b5）、A去＋A上（2108a2）
57.「黄耆」A去＋A上Ⓡ Aキ（0320a3）、A去＋A上（0330a3）、A去＋A上Ⓡ Aキ（0816a3）、C去＋C上Ⓛ A渠夷反（1232b7）

C.3　去声＋去声型…4（4）語

1.「華扁」A去＋A去（0201a3）
2.「経方」A去＋A去Ⓡ Aホウ（0101a8）
3.「酔飽」B去＋B去（0613b4）
4.「牡厲」A去＋A去（1236b2）

C.4　去声＋入声型…9（16）語

1.「痎瘧」A去＋A入（0202a8）
2.「干漆」A去＋A入（0132a9）
3.「燥濕」A去＋A入（2707b1）
4.「慈石」A去＋A入（0129b6）、A去＋○（0624a1）
5.「消濼」A去＋A入Ⓡ Aラク㋜A玉力谷反（0212a6）、A去Ⓡ Aセウ＋A入Ⓡ Aラク（2206b1）
6.「房室」A去＋A入（1207a6）
7.「樊石」A去＋A入（1141b8）、A去Ⓡ Aホン＋A入（1236a3）、A去Ⓡ Aホン＋A入（1236b2）、A去＋A入（2107b6）、A去Ⓡ Aホン＋Ⓡ Aホン（2109a3）、A去Ⓡ Aホン＋Ⓡ Aシヤク（2110b3）、Ⓡ Aホン＋Ⓡ Aシヤク（2113b5）、A去Ⓡ Aホン＋A入Ⓡ Aシヤク（2343a6）
8.「龍骨」A去＋A入（0516a7）
9.「黄蘗」A去＋A入Ⓡ A布麦反（1036a8）、A去＋A入Ⓡ A布麦反（1123b7）、C去＋C入（1128b2）

D　入声で始まるもの

D.1　入声＋平声型…6（8）語

1.「積淡」A入ⓇAシヤク＋A平ⓇAタム（0110a5）
2.「積聚」A入＋A平（0121a6）、C入ⓇAシヤク＋A平ⓇAシユ（1001a3）、ⓇAシヤク＋A平ⓇAシユ（1001b4）、B入＋B平（1003b1）
3.「続断」A入＋A平（1323a1）
4.「百會」A入＋A平（0202a7）
5.「白芷」A入＋A平（0311a4）
6.「白斂」B入＋B平ⓁAレム（1612b7）

D.2　入声＋上声型…7（13）語

1.「黒疸」A入＋A上（1001b3）
2.「蜀椒」A入＋A上（0311a3）、○＋A上（0319b8）、A入＋A上（0323a1）
3.「鐵精」A入＋A上（2117a3）
4.「薄荷」A入ⓇAハク＋A上（0316a4）
5.「白鮮」A入＋A上（0310a4）
6.「伏神」A入＋A上（0317b4）、A入＋A上（0329a6）
7.「朴消」A入＋○（0814a3）、A入B入＋A上B上（1011a6）、C入＋C上（1014a7）、C入＋C上（1016a9）、C入＋C上（1020a4）、C入＋C上（1032b3）、C入＋○（1131b4）

D.3　入声＋去声型…2（3）語

1.「缺盆」A入＋A去ⓇAホン（0318b3）、C入＋A去ⓇAホン（0210b8）
2.「濕痺」A入＋A去ⓇAヒ（0318b3）

（かとう　だいかく／山形短期大学専任講師）